

# ムカシの馬を読む

昭和59年・中山競馬場  
AJC杯  
優勝馬: シュウザンキング

© JRA



## 第104回 10年・20年・30年前の1月



# ムカシの馬を読む



## 須田鷹雄

1970年東京生まれ。競馬ライター。サラブレーダー。大阪日刊スポーツなど各種媒体に寄稿中。

1月に行われる重賞競走といえば東西の金杯が名物レースだが、グレード上位といふことと言えばG2格のAJC杯や日経新春杯である。最近ではG1級と呼ぶ馬の出走がほとんどなくなりやさびしくなっているがかつては超大物が出走することもあった。また、その大物を巡るエピソードも生まれるものだが、それは後に置いて、まずは10年前、平成16年の1月から振り返つていう。

いまから10年前にはこんな映画が封切られていた。平成16年1月13日付のサンスポから。

「実在の競走馬と男たちを描いた24日公開の米映画『サービスケット』のプレミア試写会が13日、都内で行われ、騎手を演じたトビー・マグワイアと天才ジョッキー、武豊が対面した。レースシーンには現役騎手が多数出演しており『なんでボクを使ってくれなかつたの?』と残

念そうな武に、トビーが『1対1でレースしよう』と挑戦状を叩きつけ、会場は大いに盛り上がった」この映画の原作を書いたローラ・ヒレンブランドにはJRA賞の馬事文化賞も送られたので、ご記憶の方も多いだろう。ちなみに30年前、昭和58年の1月には癌を宣告された騎手と重い骨折を負つた馬の復活劇「チヤンピオンズ」の公開がアナウンスされている(公開は6月)。20年前、平成6年の1月からはこんな「コースを御紹介しよう。1月5日付のサンスポから。

「世界最古の歴史を誇る『英國ダービー』の開催コース、エプソム競馬場(英ロンドン郊外)が、他の2競馬場(ケンブリッジパーク、サンダーバーク)とともに、競売にかけられる」となった。同競馬場の開催運営を行つてゐるHBLB(ホースレースベッティングレビーボード)競馬賭け事務収公社)が明らかにしたもので、現在中に『新スpon

サー』を求めている

英國では馬券発売と競馬施行は別々に行われており、競馬場オーナーは入場料収入や飲食テナント収入、冠スポンサー収入などに頼ることになる。しかしこの時期、冠スポンサーがいなくなってしまい、身売りを余儀なくされたといふだけ。

この時点から数年前なら日本企業が名乗りを上げたかも知れないし、今ならカタールあたりが出てきたかもしれない。しかし当時はこれといった新スポンサーが存在しなかつた。

そこで競売というわけである。競売にあたつては当然のことだが伝統と格式を重んじた競馬開催を続けることと、競馬場正規従業員の雇用を保証することが条件結局この競売は3月に行われ、ジョッキークラブの子会社である競馬ホールディングストラスト社が3025万ポンド(当時のレートで約49億円)

で落札した。

現在は投資銀行のインベステック社が2021年まで英國ダービーのスポンサーとなつており、ダービーは英國最高賞金額レースに

ない」と話している(後略)」勝ち馬分析はともかく、馬の調子の分析は「ふらち」にあたらないのでは……と「ふらち」商売の私なうのだから仕方ない。この講座、今もあるのかどうか確認してみたところ、存在している。ただしブリストル大学ではなく、ハートプリー大学といつてこそ外注のように出されことになっているようである。ハートプリー大学はホームページを見る限りスポーツや動物、農業を扱うコースで成り立つており、その中でも「馬」は中心的な存在として据えられているようである。

最後に、30年前、昭和59年の1月。この1月はグレード制が導入された最初の月だが、当時のスポーツを見ると意外にそこについて触れていません。まだグレード制の持つ意味が浸透していなかつたのかもしれない。

さて、この年のAJC杯こそ、冒頭に触れたように超大物の出走が予定され、しかし実際には出走しなかつた(できなかつた)AJC杯なのである。その超大物とは前年の三冠馬、ミスター・シービーだ。

1月20日付の日刊スポーツから引用しよう。

日本中央競馬会は、19日午後5時過ぎから中山競馬最終週(21、22日)の競馬開催と出馬投票の方法、除雪対策などについて東京・港区西新橋の競馬会本部で打開策を協議した。19日夜現在、中山競馬場では約30センチの降雪があり、20日昼まで降り続くようだと芝コースの確保が難しく(中略)ダート変更そのものは珍しくないが、アメリカJC杯に登録しているミスター・シービー陣営では「ダート戦になるようなら自重したい」と明言しており、時ならぬ大雪が3冠馬のローテーションを狂わすケースも考えられる】

木曜から降つた雪で週末の芝レースができないといふのだから、かなりの大雪だったのだろう。(ミスター・シービーについては口パリアアモント併せて一応追い切りも行つたのだが、その写真でも調教コースは雪に覆われている。

ミスター・シービーはここを回避して中山記念を目指したが、蹄の状態が悪くなり結局春は全休。秋の毎日王冠(2着)で復帰した。

AJC杯はダート1800mで行われたが、当日は特例で全レースタイムオーバーが免除となるようなコースコンディション。結果、まだ1300万条件だったシュウザンキングが逃げ切つてしまつた。当時はダート変更でもグレードが維持さ

れたので、堂々たるG2勝ちである。

ただこの勝利はさすがに恵まれず、その後同馬が1着を得ることはなかつた。

最後に駆け足だが、1月9日の報知新聞からこんなレースも御紹介しておこう。

「東西の一流ジョッキーによる『腕比べ』の一戦『東西リーディングジョッキー交流』は8日、第1回京都競馬3日目の第11レースにサラ系古馬の準オーパン級12頭によつてやや重の芝コース距離2000mで争われた」

東西が分離して競馬を行つた当时、それぞれのトップジョッキーを競わせようという企画である。

いまでは東西の別なく依頼するし

土日で東西を乗り分ける騎手も珍しくないが、なにせこの頃は全く

別々の競馬だった。馬券も「少

数の『全国発売レース』を除くと、東西それぞれでしか買えなかつたものである。

ちなみにこのレースを制したのは南井騎手。関東からは増沢、郷原、岡部が出ていたが、当時は交

流レース以外のレースでは騎乗依頼が無かつたようで、これ1レースのために1日をつぶしての参戦だった

ようだ。いまでは考えられないが、それだけ「交流」が特別なイベントだつたということだ。